

大学生の母乳育児に関する親準備性の意識調査

高田律美¹⁾, 川出富貴子²⁾, 川崎幹子³⁾, 矢野奈美⁴⁾, 田村優佳^{5,6)}, 加藤匡宏^{5,6)}

1) 愛媛県立医療技術大学、2) 広島文化学園大学研究科、3) 宇部フロンティア大学

4) 愛媛県立中央病院、5) 愛媛大学教育学部附属教育実践総合センター、6) 愛媛大学大学院連合農学研究科

Survey of university students regarding the awareness of the readiness for parenthood of breast-feeding

Norimi TAKATA, Fukiko KAWADE, Mikiko KAWASAKI,
Nami YANO, Yuka TAMURA and Tadahiro KATO

(平成26年6月16日受理)

抄録:

【目的】本研究では、大学生の親準備性の中でも母乳育児に関連する意識が将来、自分およびパートナーが母乳育児を経験したいという「母乳育児希望」にどのように影響しているのかを明らかにすることを目的とした。

【方法】大学看護学科、福祉心理学科、児童発達学科の1年～4年生、185名について(1)「将来、母乳のみで育てるかどうか」(2)「授乳場面の経験」(3)「乳幼児への好意感情」(4)「母乳育児に関する知識」(5)「母乳育児像」(6)「母乳育児の積極的価値観」これらで調査用紙を作成し無記名調査した。

【結果】(1) 将来の授乳方法の希望については母乳希望の有無は約半数ずつの割足を占めた。(2) 母乳あるいはミルクの授乳場面の過去・現在の経験の有無と母乳希望有無の群間に有意差はなかったが、大学入学後に子どもに栄養を与えたことがある経験をしたある学生は、自分は母乳で育てたいという考えを持つことが示唆された。(3)「乳幼児の好意感情」「母乳育児に関する知識」は全項目で高く母乳希望有・無の群間に有意差はなかった。(4)「母乳育児像」「母乳育児の積極的価値観」についても母乳希望有無の群間に有意差はみられなかった。

【考察】大学生の乳児に対する好意感情や母乳に関する知識は高かった。母乳育児のような自然な形で親子関係を育める、親準備性は大学入学後の授乳に関する経験に幾分の違いがみられたが、将来の母乳育児と母乳に関する意識に明らかな関連は見られなかった。

キーワード: 大学生(university students)・母乳育児(breast-feeding)・親準備性(readiness for parenthood)

1. はじめに

青年期は親となるための準備期ともいえる。青年期の「親準備性」の概念について「望ましい親行動の遂行に必要な、プレ親期(青年期)における、価値的、心理的態度や、行動的・知識的側面の準備状態を意味してい

る」¹⁾²⁾としているが、その後もさまざまな検討がなされてきて、岡本らは育児行動という親の役割を遂行するために必要な資質や準備を「親準備性」として、子どもの養育、家族の結合、家事労働、介護を含む「親準備性」ととらえている³⁾。その中でも川瀬は親としての準

備について「子どもへの関心や子育てへの備え・親となることへの意識などの資質」⁴⁾をあげさらに親としての準備のひとつとして、堤らは「授乳という行為そのものが育児の一部である」⁵⁾と述べており。親準備性の状態を知る一貫として母乳育児への希望など、青年期にある大学生に問うことは適切であると考えられた。そこで、大学生の親準備性の中でも母乳育児に関連する意識が将来、自分およびパートナーが母乳育児を経験したいという「母乳育児希望」にどのように影響しているのかを明らかにすることで、青年期の親準備状態の把握に努める目的で調査を行った。

2. 研究方法

(1) 対象者

A 大学看護学科、福祉心理学科、児童発達学科の1年～4年生、合計185名

(2) 調査期間

平成22年9月～11月

(3) アンケート調査

無記名自記式質問紙を用いた。アンケート調査を実施する教室にアンケート回収箱を設置し、回答後にアンケート回収箱に入れてもらい回収した。調査項目は以下である。

①対象の属性：性、学年、年齢

②将来の授乳方法の希望：「あなたは将来、自分かパートナーがどのような授乳方法を行いたい、あるいは行ってほしいか」という問いに母乳・混合・ミルクの3項目を選択回答とした。

③「授乳場面の経験」(表1)：母乳を子どもに授乳している場面の経験について、「1. 母親がきょうだいに授乳している場面をみた」から「6. テレビで授乳している場面をみた」まで計6項目で尋ねた。ミルクを子どもに授乳している場面の経験について、「7. 母親がきょうだいにミルクをつくっている場面をみた」から「12. テレビでミルクを哺乳びんであげている場面をみた」まで計6項目で尋ねた。回答方法は、「はい」、「いいえ」の

複数回答とした。入学前の授乳経験と入学後の授乳経験それぞれ回答を求めた。

表1 授乳場面の経験 (大学入学前・入学後)

1. 母親がきょうだいに授乳している場面をみた
2. 姉妹、親戚が授乳している場面をみた
3. 友達が授乳している場面をみた
4. 実習中(職場体験など)に授乳している場面をみた
5. 他人が公共の場(公園・空港の授乳室など)で授乳している場面をみた
6. テレビで授乳している場面をみた
7. 母親がきょうだいにミルクをつくっている場面をみた
8. 姉妹、親戚がミルクを哺乳びんであげている場面をみた
9. 友達がミルクを哺乳びんであげている場面をみた
10. 自分がミルクを哺乳びんであげた経験がある
11. 他人がでミルクを哺乳びんであげている場面をみた
12. テレビでミルクを哺乳びんであげている場面をみた

④「乳幼児への好意感情」：母乳育児は子どもへの関心が重要であると考え、青木ら⁶⁾が作成した母性準備性尺度のうち乳幼児への興味・関心を示すものとして「乳幼児への好意感情尺度」から計9項目を使用した(のちに佐々木により改訂され親準備性尺度となる⁷⁾)。評定は1「全く思わない」、2「あまり思わない」、3「どちらでもない」、4「ややそう思う」、5「非常にそう思う」の5段階評定とした。

⑤「母乳育児に関する知識」：母乳の成分、母乳の栄養面、母子相互作用、母子愛着形成について等、計7項目を選択回答とした。1項目1点として、総合点を7点とした。

⑥「母乳育児像」：母乳育児へのイメージを図るのとして、室津が作成した「母乳育児像」⁸⁾をもとに、分娩に関する5項目を省いた25項目を使用した。これは父親に対しても使用可能な質問紙である為、出産経験がない学生にも適応できると考えた。評定は1「全く思わない」、2「あまり思わない」、3「どちらでもない」、4「ややそう思う」、5「非常にそう思う」の5段階評定とした。

⑦「母乳育児の積極的価値観」：青木ら⁶⁾が作成した母性準備性尺度のうち育児労働観を示す「育児への積極性尺度」をもとに、のちに佐々木⁷⁾により親準備性尺度となり青年期男女に適用されている尺度から母乳育児についての問い「母乳育児の積極的価値観」計26項目と

した。評定は1「全く思わない」、2「あまり思わない」、3「どちらでもない」、4「ややそう思う」、5「非常にそう思う」の5段階評定とした。

(4) 分析方法

- ①対象の属性について、単純集計を行った。
- ②将来の授乳方法（母乳・混合・ミルク）の希望について、単純集計を行った。また、将来の授乳方法のうち母乳と答えたものを「母乳希望有」とし、混合・ミルクと答えたものを「母乳希望無」と分類し、分析に用いた。
- ③「授乳場面の接触経験」の有無と「母乳希望」の有無について χ^2 検定をおこなった。
- ④「母乳育児に関する知識」について、総合点を7点とし、項目ごとに平均得点・標準偏差を算出した。そして、t検定を用いて「母乳希望有」と「母乳希望無」との間で値を比較した。
- ⑤「乳幼児への好意感情」「母乳育児像」「母乳育児の積極的価値観」それぞれについて、項目ごとに平均得点・標準偏差を算出した。そして、t検定を用いて「母乳希望有」と「母乳希望無」との間で値を比較した。

上記全ての統計処理は、統計処理ソフト SPSS バージョン 17 を使用し、有意水準を 5 % とした。

(5) 倫理的配慮

研究協力者に対して、匿名化や秘密の保持、調査への参加の自由、研究目的以外に利用しないことについて口頭で説明した。また、研究の趣旨、分析方法、匿名性の確保についてアンケート用紙に示した。アンケート調査は無記名で行うことによって、匿名性を確保した。回収したアンケートは研究の終了時点で破棄するものとした。アンケートへの回答をもって研究協力者からの同意を得たものとした。

3. 結果

(1) 対象者の背景

対象者は看護科 118 名（有効回答率 54 %）、福祉心理学科 50 名（有効回答率 53 %）児童発達学科 17 名

（有効回答率 22 %）であった。対象者の平均年齢は 20.9 ± 4.1 歳であった。学年別にみると、4 年生 58 名、3 年生 45 名、2 年生 28 名、1 年生 54 名であった。男女比をみると男子学生 55 名（30 %）、女子学生 130 名（70 %）であった。男女比に偏りはあるが男女共通に自らのこととしてどのくらい母乳育児に関心を持っているかという点が本調査の焦点であるため、男女比較は行わなかった。

(2) 将来の授乳方法の希望について

母乳の希望は 88 人 47.6 % であった。混合の希望は 76 人 41.1 % であった。ミルクの希望は 21 人 11.4 % であった。

(3) 授乳場面の経験と母乳育児希望の関連

授乳場面の経験のうち母乳授乳経験と母乳育児希望の関連を表 2 に示す。授乳場面の経験のうち母乳授乳経験と母乳育児希望の関連は χ^2 検定にて全項目有意差がなかった。

表2 母乳授乳経験^{※1}と母乳育児希望の有無

		母乳希望有		母乳希望無	
入学前	母親	有	18	20	
	(N = 185)	無	70	77	
	姉妹・親戚	有	26	29	
	(N = 185)	無	62	68	
	友達	有	6	9	
	(N = 185)	無	82	88	
	職場体験	有	5	10	
	(N = 185)	無	83	87	
	公共の場	有	10	17	
(N = 185)	無	78	80		
入学後	テレビ	有	40	47	
	(N = 185)	無	48	50	
	母親	有	2	0	
	(N = 184)	無	85	97	
	姉妹・親戚	有	14	13	
	(N = 185)	無	74	84	
	友達	有	15	10	
	(N = 185)	無	73	87	
	実習	有	17	19	
(N = 185)	無	71	78		
公共の場	有	10	10		
(N = 185)	無	78	87		
テレビ	有	22	26		
(N = 185)	無	66	71		

² χ^2 検定にてすべての項目に有意差なし

※1：表1の1～6の項目に対応

表3 ミルク授乳経験^{※1}と母乳育児希望の有無

		母乳希望有	母乳希望無
入学前	母親	有 11	15
	(N = 185)	無 77	82
	姉妹・親戚	有 22	24
	(N = 185)	無 66	73
	友達	有 11	7
	(N = 185)	無 77	90
	職場体験	有 26	26
	(N = 185)	無 62	71
	公共の場	有 24	64
	(N = 185)	無 22	75
入学後	テレビ	有 35	36
	(N = 185)	無 53	61
	母親	有 2	0
	(N = 185)	無 86	97
	姉妹・親戚	有 15	10
	(N = 185)	無 73	87
	友達	有 15	4
	(N = 185)	無 73	93
	実習	有 19	11
	(N = 185)	無 69	86
	公共の場	有 15	11
	(N = 185)	無 73	86
	テレビ	有 17	17
	(N = 185)	無 71	80

χ^2 検定にてすべての項目に有意差なし

※1：表1の7～12の項目に対応

授乳場面の経験のうちミルク授乳経験と母乳育児希望の関連を表3に示す。授乳場面の経験のうちミルク授乳経験と母乳育児希望の関連は χ^2 検定にて全項目有意差がなかった。

(4) 「乳幼児への好意感情」と母乳希望の有無の関連

「乳幼児への好意感情」と母乳希望有無との関連を表4に示す。「乳幼児への好意感情」の母乳希望有無別の比較については全項目において有意差は認められなかった。

母乳希望有・無ともに「乳幼児への好意感情」のうち「1. 赤ちゃんに関心はありますか」「2. 赤ちゃんを抱いてみたいとおもいますか」「3. 赤ちゃんを見るとかわいいとおもいますか」などすべての項目において、平均得点が4点以上（ややそう思う～非常にそう思う）を示した。

(5) 母乳育児に関する知識と母乳育児希望の有無との関連

母乳育児に関する知識と母乳希望有無との関連を表5に示す。母乳育児に関する知識と母乳希望有無別の関連は全項目において有意差は認められなかった。

表4 「乳幼児の好意感情」と母乳希望の有無 N=185

	母乳希望有	母乳希望無
	平均得点 (標準偏差)	
1. 赤ちゃんに関心はありますか	4.44 (0.90)	4.43 (0.87)
2. 赤ちゃんを抱いてみたいと思いますか	4.58 (0.84)	4.54 (0.78)
3. 赤ちゃんをみると「かわいいな」と思いますか	4.75 (0.73)	4.73 (0.51)
4. 赤ちゃんと一緒に遊ぶことが好きですか	4.47 (0.93)	4.37 (0.91)
5. あなたは赤ちゃんが好きですか	4.51 (0.96)	4.53 (0.74)
6. 赤ちゃんの世話をすることが好きですか	4.26 (1.02)	4.10 (1.08)
7. 赤ちゃんに興味がありますか	4.43 (0.92)	4.42 (0.81)
8. 赤ちゃんをみるとあやしたり笑いかけたりしますか	4.36 (1.01)	4.38 (0.90)
9. 赤ちゃんのことについて知りたいと思いますか	4.31 (0.96)	4.32 (0.85)

t 検定にてすべての項目に有意差なし

表5 「母乳育児に関する知識」と母乳希望の有無 N=185

	母乳希望有	母乳希望無
	平均得点 (標準偏差)	
1. 母乳の栄養面	4.44 (0.90)	4.43 (0.87)
2. 母子相互作用	4.58 (0.84)	4.54 (0.78)
3. 母子愛着形成	4.75 (0.73)	4.73 (0.51)
4. 母乳の成分	4.47 (0.93)	4.37 (0.91)
5. 母乳の成り立ち	4.51 (0.96)	4.53 (0.74)
6. 産後の母体の回復促進	4.26 (1.02)	4.10 (1.08)
7. 母乳育児成功のための10か条	4.43 (0.92)	4.42 (0.81)

t 検定にてすべての項目に有意差なし

母乳希望の有無にかかわらず、いずれの母乳育児に関する知識も平均得点が4点以上（ややそう思う～非常にそう思う）であり、学生は母乳育児に関する知識を有している。

(6) 「母乳育児像」と母乳希望との有無の関連

「母乳育児像」と母乳希望有無との関連を表6に示す。「母乳育児像」の母乳希望有無との関連については全項目において有意差はみられなかった。

「母乳育児像」のうち母乳育児希望有の平均得点が4点以上（ややそう思う～非常にそう思う）の項目では「1. 母乳には赤ちゃんにあった十分な栄養がある」、「3. 母乳には免疫が多くふくまれる」、「6. 母乳育児は母と子の絆が深まる」など13項目である。「母乳育児像」のうち母乳育児希望有の平均得点が3点以下（どちらでもない～全く思わない）の項目では「5. 母乳育児は手間がかからず簡単である。」、「7. 乳房の手入れは簡単である」、「15. 母乳は赤ちゃんの頭がよくなる」などの

6項目である。「母乳育児像」のうち母乳育児希望無の平均得点が3点以下（どちらでもない～全く思わない）の項目では「7. 乳房の手入れは簡単である」、「16. 母乳では足りているか不安である」、「18. 母乳は赤ちゃんが泣いたら飲ませるものである」、「19. 母乳は時間を決めて飲ませるとよい」の4項目である。

(7) 「母乳育児の積極的価値観」と母乳希望の有無との関連

「母乳育児の積極的価値観」との母乳希望有無との関連を表7に示す。「母乳育児の積極的価値観」については母乳希望有無別の比較については全項目において有意差はみられなかった。

「母乳育児の積極的価値観」のうち母乳育児希望有の平均得点が4点以上（ややそう思う～非常にそう思う）の項目では「19. 母乳育児をしている母親はやさしくみえる」、「20. 母乳育児はすばらしい役割である」の2項目であった。「母乳育児の積極的価値観」のうち母

表6 「母乳育児像」と母乳希望の有無 N=185

	母乳希望有	母乳希望無
	平均得点	
	(標準偏差)	
1. 母乳には赤ちゃんにあった十分な栄養がある	4.45(0.80)	4.38(0.65)
2. 母乳は赤ちゃんがアレルギーになる心配がない	3.24(1.14)	3.04(1.23)
3. 母乳には免疫が多くふくまれる	4.36(0.82)	4.29(0.88)
4. 母乳は経済的である	3.92(1.10)	3.97(0.86)
5. 母乳育児は手間がかからず簡単である	2.99(1.17)	3.16(1.10)
6. 母乳育児は母と子の絆が深まる	4.43(0.83)	4.36(0.93)
7. 乳房の手入れは簡単である	2.98(1.01)	2.88(1.06)
8. 母乳育児は清潔である	3.49(0.92)	3.37(0.94)
9. 母乳育児は自然なことである	4.14(0.79)	4.02(0.90)
10. 母乳を飲ませるべきである	4.14(0.83)	4.06(0.89)
11. 母乳育児は安心である	3.93(0.86)	3.71(0.94)
12. 母乳育児はスキンシップが図れる	4.41(0.81)	4.41(0.83)
13. 母乳は赤ちゃんの満足度が高い	4.10(0.82)	4.03(0.86)
14. 母乳育児だと赤ちゃんはよく寝る	3.75(0.90)	3.68(0.93)
15. 母乳はあかちゃんの頭がよくなる	2.98(0.90)	3.14(0.83)
16. 母乳では足りているか不安である	2.83(1.03)	2.79(1.03)
17. 赤ちゃんは母乳を欲しがらるものである	3.80(0.86)	3.69(0.86)
18. 母乳は赤ちゃんが泣いたら飲ませるものである	3.13(1.06)	2.99(1.06)
19. 母乳は時間を決めて飲ませるとよい	2.69(1.17)	2.86(1.12)
20. 母乳を飲ませることは幸せだ(幸せそうだ)	4.22(0.73)	4.06(0.81)
21. 母乳を飲ませることは楽しい(楽しそうだ)	3.64(1.02)	3.68(0.90)
22. 母乳を飲ませることは辛い(辛そうだ)	3.10(1.13)	3.12(1.17)
23. 母乳を飲ませることは母親のつとめである	3.60(0.97)	3.60(0.93)
24. 母乳育児を支えることは夫としてのつとめである	4.18(0.89)	3.93(0.99)
25. 母乳育児をすると眠れない	2.98(1.04)	3.11(1.10)

t検定にてすべての項目に有意差なし

斜体文字で示した、16, 19, 20, 22, 25は逆転項目

表7 「母乳育児の積極的価値観」と母乳希望の有無

N=185

	母乳希望有 平均得点(標準偏差)	母乳希望無 平均得点(標準偏差)
1. 母乳育児は女性の生きがいである	3.41(0.91)	3.29(0.91)
2. 母乳育児をしている間は、周りから取り残されてしまう	3.63(0.98)	3.52(0.94)
3. 将来、自分(パートナー)が母乳育児をするなんて考えたこともない	3.67(1.10)	3.80(1.06)
4. 母乳育児は素晴らしい仕事である	3.75(0.94)	3.77(0.87)
5. 母乳育児はつらい仕事である	3.06(1.04)	3.06(1.08)
6. 自分は母乳育児をすることに自信がない(パートナーの母乳育児を支援する自信がない)	3.11(1.02)	3.24(1.03)
7. 自分も母乳育児をやってみたい(パートナーに母乳育児をしてほしい)	3.99(0.95)	3.87(0.86)
8. 母乳育児をしている母親はつかれてみずばらしくみえる	3.81(1.12)	3.81(1.01)
9. 母乳育児はやりがいのある仕事である	3.84(0.91)	3.66(0.88)
10. 母乳育児をしていると、自分は好きなことができない	3.20(1.05)	3.20(1.03)
11. 母乳育児をしていると、パートナーと一緒にやりたいことができない	3.35(1.08)	3.22(0.96)
12. 母乳育児はつらい役割である	3.40(1.10)	3.27(1.15)
13. 母乳育児によって自分自身が成長できる	3.94(0.86)	3.82(0.95)
14. 母乳育児によってパートナーも成長できる	3.77(0.93)	3.68(0.84)
15. 母乳育児はつまらない仕事である	3.92(1.04)	3.90(0.97)
16. 母乳育児をしていると母親はかがやいてみえる	3.74(1.00)	3.68(0.97)
17. 母乳育児はつまらない役割である	3.94(1.11)	3.97(1.01)
18. 母乳育児をすることはおっくうである	3.61(1.00)	3.53(1.10)
19. 母乳育児をしている母親はやさしくみえる	4.17(0.82)	4.05(0.89)
20. 母乳育児は素晴らしい役割である	4.01(0.89)	4.09(0.95)
21. 母乳育児をしている母親はつよくみえる	3.95(0.91)	3.81(1.01)
22. 母乳育児は自分を犠牲にするものである	3.26(1.09)	3.25(1.12)
23. 母乳育児はやりがいのある役割である	3.90(0.86)	3.92(0.90)
24. 母乳育児をしていると、子どものことばかりで視野が狭くなる	3.15(1.01)	3.28(0.93)
25. 将来、自分が(パートナー)が母乳育児をすることが楽しみである	3.84(0.93)	3.70(1.03)
26. 母乳育児をしていると、おだやかになれる	3.70(0.95)	3.82(0.85)

t検定にてすべての項目に有意差なし

斜体文字で示した、2, 3, 5, 6, 8, 12, 15, 17, 18, 22, 24は逆転項目

母乳育児希望有の平均得点が3点(どちらでもない)以上の項目では「1. 母乳育児は女性の生きがいである」、「4. 母乳育児は素晴らしい仕事である」など12項目であった。母乳育児希望有の平均得点が3点(どちらでもない)以上の項目で逆転項目は「2. 母乳育児をしている間は周りから取り残されてしまう」、「3. 将来、自分(パートナー)が母乳育児をするなんて考えたこともない」など12項目であった。

「母乳育児の積極的価値観」のうち母乳育児希望無の平均得点が4点以上(ややそう思う～非常にそう思う)の項目は「19. 母乳育児をしている母親はやさしくみえる」、「20. 母乳育児は素晴らしい役割である」の2項目であった。「母乳育児の積極的価値観」のうち母乳育児希望無の平均得点が3点(どちらでもない)以上の項目では「1. 育児は女性の生きがいである」、「4. 母乳育児は素晴らしい仕事である」など12項目であった。

母乳育児希望無の平均得点が3点(どちらでもない)

以上の項目で逆転項目は「2. 母乳育児をしている間は周りから取り残されてしまう」、「3. 将来、自分(パートナー)が母乳育児をするなんて考えたこともない」など12項目であった。

4. 考察

親となるための準備期ともいえる青年期の「親準備性」の概念についてはさまざまに検討されている。本研究では、青年期にある大学生を対象に親準備性の中でも母乳育児に関する意識について検討した。

(1) 将来の授乳方法の希望について

「母乳希望有」と積極的にとらえた群が47.6%であった。混合・ミルクと答えた群を母乳希望無群ととらえ、その群は52.5%であった。母乳希望有・無はいずれも約半数であった。

(2) 授乳場面の経験と母乳育児希望

授乳場面の経験のうち母乳授乳経験とミルク授乳経験いずれも自らが母乳育児を希望するかどうかには有意差はみられなかった。母乳育児は本来、母子の自然な姿である。母親から出乳した子どもが 1 時間後には自力で母親の体を這い上がり、乳房にたどり着く自然の姿から本来子どもの持つ力がある⁹⁾。大学生が母乳育児やミルク授乳の経験を通して価値観がどのようなものであるか詳細を調査する必要があると示唆された。

(3) 「乳幼児への好意感情」と「母乳育児に関する知識」の母乳希望の有無について

「乳幼児への好意感情」はすべての項目において平均得点 4 点以上（ややそう思う～非常にそう思う）であった。約 6 割の大学生に「母乳育児に関する知識」があり、「母乳育児に関する知識」についての平均得点も 4 点以上（ややそう思う～非常にそう思う）であった。「乳幼児への好意感情」、「母乳に関する知識」について母乳希望有無別に比較した結果、全項目において有意差はみられなかった。本調査は対人関係の専門教育の教育過程の学生に対し実施されたため、母乳や母子のアタッチメントや人間の基本的信頼感の重要性の学習の場が設けられている結果であったと考えられる。

(4) 「母乳育児像」と母乳希望の有無

「母乳育児像」と母乳希望の有無の関連は全項目有意差がなかった。母乳希望有の群でのみ平均得点が 4 点以上（ややそう思う～非常にそう思う）であった項目は「24. 母乳育児を支えることは夫としての務めである」であった。このことは、母乳育児は母親のみでなくパートナーも共にこなす育児の一環であるという理解のある学生に母乳育児希望の学生が多いことを示しているとも考えられる。大日向¹⁰⁾によると母性・父性という概念を超え育児性の重要性を述べている。そこでは性役割にとらわれることなく、親と人のひとりひとりの育児能力を見出し、その多様性、個性を見出した支援の重要性を示している。親準備期にある学生の育児能力育成の際に重要な視点であるといえる。

母乳育児希望有無ともに「母乳育児像」の平均得点が

3 点以下（どちらでもない～全く思わない）の項目は、

「16. 母乳では足りているか不安である」、「19. 母乳は時間を決めて飲ませるとよい」であった。本研究の対象者は、母親は子どもに母乳を定時に与えるのではなく、空腹時、子どもからの泣くという行為によって母乳を与えるものだと理解しているようである。また、母親は子どもが満足するだけの母乳を充分に与えることが可能な存在であるということを理解していると考えられる。対象者の大学生は、自然な母乳育児像を理解していると考えられるが、必ずしも母乳育児を希望することにつながるわけではないことが示唆された。

(5) 「母乳育児の積極的価値観」と母乳希望

「母乳育児の積極的価値観」の母乳希望有無について、母乳希望有無別の比較では、全項目において有意差はみられなかった。母乳育児についての積極的な価値観と母乳育児を希望したいという自分自身の実際の行動への価値には直接的に結びつかないことが示唆された。

(6) 社会的背景と今後の課題

子どもが生まれてはじめて行う育児に母乳育児がある。これは親と子の両者を情緒豊かな絆で結び付け基本的信頼という人間としての基盤をつくる大切な関わりである。親にとって母乳育児は育児の中でも我が身を持って育てるといふ、物や他人に頼れない育児である。

わが国の母乳育児の社会的背景について述べる。WHO & ユニセフの提唱する「母乳育児成功のための 10 か条」を推進する事により十分な母乳を確保し、母乳育児率の向上を図る事にあるその推進病院を「赤ちゃんにやさしい病院：BFH」と認定している。全世界で BFH 認定産科施設数は 2 万近くになったが、日本にはなかなか浸透しない¹¹⁾と言われている。スウェーデンのように国の施策として産科施設での認定が 100 % の国もあるが、日本においては 2013 年には 69 施設が認定されているのみである¹²⁾。また最近の母乳育児支援の力点が、母乳確保へ向けての技術的援助から、母乳育児中のお母さんに対する「emotional support」に置き、精神的な親子関係をより重視して母乳育児を楽しんでいける支援^{13,14)}へと変更していて、母乳育児に関する支援が母乳至上主義でないこと、完全な母乳育児の遂行を意

味していないことも一般には十分に知られていない現状もある。

また 1981 年第 34 回世界保健総会で、通称WHOコードといわれる「母乳代替品のマーケティングに関する国際基準」が採択された¹⁵⁾。このコードの目的は、粉ミルクの無償提供の停止など、「販売流通（マーケティング）システム」あるいは「商業目的ではない流通（支給）システム」を通じて、それを必要とする人々が適宜入手できるようにしなければならないこと、マーケティングや支給の際に、母乳育児の保護と推進が妨げられてはならないという基準で日本は最後の承認国となった経緯がある。

このような日本において、母乳育児の本質を理解する機会の少なさとミルクおよび哺乳瓶等の販売の広告効果が大きい社会においては大学生が青年期までに育成してきた環境的背景から少なからず影響を受けている可能性が示唆される。

また母乳育児そのものについて述べると、母乳育児は親の選択権のある育児ともいえる。そのことは、親がどのようなものに道徳的価値をもち子どもを育てるかという親自身のモラル的判断やその親自身の考えと不可分といえる。コールーバークはモラルジレンマとして道徳的価値の選択について、その最終段階として、普遍的倫理的思考にまで至るとしている¹⁶⁾。コールーバークは徳目を一律に注入するのではなく、一人ひとりの子ども道徳的認知構造を変革し、普遍的倫理的思考にまで至ることが重要としている¹⁷⁾。

青年期までの親準備性の涵養について述べると、“社会的態度”の形成は経験や学習を通して得られるといわれ、態度の形成には認知・感情・行動の要素があるといわれている¹⁸⁾。今回の調査のなかで、母乳育児に関する知識や母乳育児場面の接触経験は母乳育児を希望することに関連を認めなかった。また、乳幼児への好意感情、母乳育児像、母乳育児の積極的価値観は母乳希望の有無に関わらず高値を示した。従って、母乳育児の利点や重要性を認知している者も、親準備性の一つである母乳育児では感情や行動を含む社会的態度“母乳育児を行いたい”に必ずしもつながるわけではない。しかしながら、母乳に関する知識などの多寡にかかわらず多くの学生が自然な形態としての母乳育児に自己決定していることは

注目すべき点といえる。哺乳類としては自然な形態としての子どもの育児を、大学生自らが自己決定としてなぜ選択したのか、それに至るまでの過程について今後さらなる詳細な調査が必要と考えられる。また、母乳育児の利点や重要性に気づきながらミルクと母乳との混合栄養やミルクのみでの育児を希望する者への心理社会的な背景を含めた詳細な調査が必要であると考えられる。

5. 結論

- (1) 将来の授乳方法の希望については母乳希望の有無は約半数ずつの割足を占めた。
- (2) 母乳あるいはミルクの授乳場面の過去・現在の経験の有無と母乳希望有・無の群間に有意差はなかった。
- (3) 「乳幼児の好意感情」「母乳育児に関する知識」も全項目で高く母乳希望有・無の群間に有意差はなかった。
- (4) 「母乳育児像」「母乳育児の積極的価値観」についても母乳希望有・無の群間に有意差はみられなかった。
- (5) 母乳育児のような自然な形で親子関係を育める、親準備性の重要性についての教育的視点のさらなる検討が望まれる結果となった。

6. 引用文献

- 1) 岩田崇, 秋山泰子, 井上義朗, 深谷和子: 青年期の親準備性に関する研究
<http://www.niph.go.jp/wadai/mhlw/1982/s5706093.pdf>
- 2) 井上義朗, 深谷和子: 青年期の親準備性をめぐって
- 3) 青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析 広島大学心理学研究, 第 4 号, 159-172, 2004
- 4) 川瀬隆千: 大学生の親準備性に関する研究, 宮崎公立大学人文学紀要, 第 17 巻, 第 1 号 29 - 40, 2010
- 5) 堤ちはる, 高野陽, 三橋芙佐子: 母乳育児に関する調査研究 (I) —栄養士・保育士課程の学生の意識について—日本子ども家庭総合研究所紀要, 第 41 集 203-217, 2004
- 6) 堀洋道, 山本真理子, 松井豊: 心理尺度ファイル, 人間と社会を測る, 堀内出版, 380-383, 2000
- 7) 佐々木綾子: 親準備性尺度の信頼性・妥当性の検討—福井大学医学部研究雑誌 第 8 巻 第 1 号・第 2

号合併号 41-50,2007

- 8) 室津史子：母乳育児に対する母親と父親の意識,山陽学園大学「山陽論」16,133-143,2009
- 9) M.H.クラウス,J.H.ケネル,P.H.クラウス：親と子のきずなはどうつくられるか,医学書院,76-84,2004.
- 10) 佐々木保行・高野陽・大日向雅美他：「育児ノイローゼ」,有斐閣,1982
- 11) WHO/UNICEF Protecting.Promoting and Supporting Breastfeeding-The Special Role of Maternity Services.A Joint WHO/UNICEF Statement.1989
- 12) 日本母乳の会, <http://www.bonyu.or.jp/index.asp>
- 13) 名和文香, 服部律子他：赤ちゃんにやさしい病院（BFH）における母乳育児支援の実態と課題, 岐阜県立看護大学紀要, 第7巻2号,2007
- 14) 橋本武夫編著：母乳育児支援アンサーブック, ペリネイタルケア,メディカ出版,140-141,2006
- 15) 母乳代用品のマーケティングに関する国際規準（邦訳全文）：
http://www.jalc-net.jp/International_code.pdf
- 16) 櫻井育夫著：道徳的判断力をどう高めるか,コールバーグ理論における道徳的教育の展開,北大路書房, 107-127, 1997
- 17) 小野寺正一/藤永芳純編：三訂 道徳養育学ぶ人のために,世界思想社,94-98, 2013
- 18) 大橋正夫,佐々木薫編：社会心理学を学ぶ,有斐閣選書,44-53,1989